

構文スキーマ理論序説

菅井三実

0. はじめに

本稿の目的は「認知言語学(Cognitive Linguistics)」の見地から、日本語の分析に有効と思われる構文スキーマを提案し、その骨子を概説するとともに、有効性と妥当性を検証することにある。^[1] 認知言語学的研究と従来の言語研究との相違点は、概ね、①認知過程(cognitive processing)、②統語論(syntax)の非自律性、③比喩(metaphor)、および、④動機づけ(motivation)の4点に要約できるが、この中で本稿での議論に直接関連するのは、②の「統語論の非自律性」である。これにより、単に統語論と意味論が互いに切り離して分析できないことが強調されるばかりでなく、人間の認知過程にとって本質的な「知的意味(cognitive meaning)」のレベルでは“形が同じであれば基本的には意味も同じである”という《意味と形式の一対一対応》の原則が積極的に支持されることになる。^[2] この原則は、文法関係のレベルにおいても有意義なものであり、日本語の助詞のように純粹に文法的な機能形態素にも原則として単一の意味しか認められない点に

注意されたい。これが、以下の議論にとって理論的な前提になるからである。

次節では、格助詞「が」の多義性を取り上げて、問題の要点を明らかにするところから議論を始めたい。

1. 問題の所在— 2つの「ガ格」

一般に、格助詞の「ガ格」といえば、次の(1)に挙げたような用例を思い浮かべるのが普通であろう。

- (1)(a) この人達が私を助けて下さったのです。
- (b) ベルリンの壁が崩壊した。
- (c) 子供が頭をテーブルにぶつけた。
- (d) こんなところから虫が出て来た!

文法関係の観点からみると、(1)の「ガ格」を統語的な《主語》と認定することに異論はないだろう。また、意味的な観点から見ると、行為の実行者という意味で、<動作者(agent)>という用語が用いられ、積極的な意志をもたないときは、<経験者(experiencer)>あるいは<主題(theme)>などと呼ばれるが、本稿では一括して<主体>と呼ぶことにする。

むしろ、問題になるのは、次の(2)に見られるように、上とは質的に明確に異なる「ガ格」である。

- (2)(a) 今もあの人が恋しい。
- (b) 髪の長い女性が好きです。
- (c) このクラブが欲しかったんです。
- (d) わたしの言葉が分かりますか。

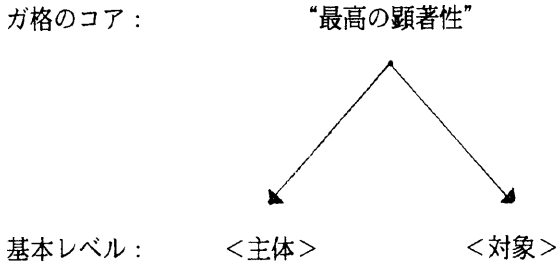
(2)の「ガ格」は意味的にはむしろ<対象>という方が適当であり、この点上に挙げた<主体>の「ガ格」とは対立的である。

尾上(1985, 1987)の議論は、従来、目的語と見なされてきた形容詞文や与格文の「ガ格」を《ことがらの中核的対象》という意味において《主語》と認定することにより、一般的な動詞文において<主体>を表す「ガ格」と同等の資格を与えることを可能にした。^[3] ここで問題にしたいのは、(2)の「ガ格」成分を文法的な《主語》と認定するかどうかよりも、いま厳然と「ガ格」には<主体>と<対象>という2つの意味機能があり、より重要なのは、こうして「ガ格」に2つの意味を認めることが明らかに《意味と形式の一対一対応》の原則に反するという点である。^[4]

さらに、このようなく<主体>と<対象>は意味的に対立的なものであり、これを従来の方法で語彙分解して共通するプリミティブな意味成分を抽出することは困難であろうし、まして、一方の意味を他方の意味から派生させるという考えは成り立たない。いまや、具体的な述語を伴った陳述のレベルでは「ガ格」に2つの意味があることは否めないので、本稿では<主体>と<対象>を「ガ格」の基本的意味と認めることとする。その上で《意味と形式の一対一対応》の原則に従って「ガ格」に何らかの単一の意味を求めるとすれば、より高次のレベルに昇華させることによって初めて可能であり、それが下位のレベルに写像されるとき述語の質的差異(語彙的意味)に応じて異なる意味機能を担うと考えざるを得ない。それでは「ガ格」に求め得る共通の意味特性とは何であろうか。本稿では、高次レベルにおける理論値としての抽象的意味を“一定のドメイン(domain)の中で最も顕著(most salient)な項である”という特性に求めることにしたい。^[5] ここで“一定のドメイン”というのは《述語動詞(形容詞)》と《述語と直接結び付く名詞的成分》とし、特に「ハ格」成分と「モ格」成分は含めないものとする。

そうすると、抽象的な高次レベルの意味と具体的な基本レベルの意味の関係は、次ページの図(1)のように示すことができる。

ここでいう基本レベルの意味とは具体的な述語を伴ったときの意味であるから、実質的に述語依存的であって、2つの意味<主体>と<対象>は述語によって決められると考えられる。

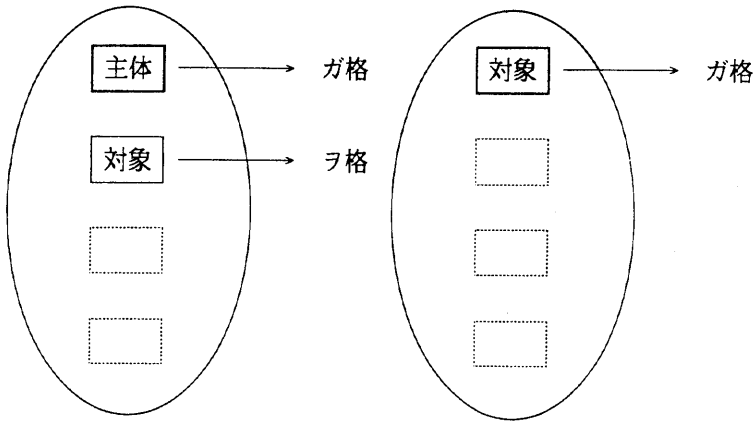


図(1)：「ガ格」の2次元の特徴づけ

しかし、同時に、述語を2つのグループに分けられるということから、基本的な述語パターンが2つあることは間違いない点を強調しておきたい。^[6]

2. 構文スキーマによる規定の試み

前節の最後で指摘したように、動詞句(VP)のレベルに2つのパターンがあることを認めることから、本節では、多義的な「ガ格」の意味を最も自然に解決する方法を提案する。具体的には、次ページの図(2)(a)および(b)に示されるように、問題の2つの意味を分化させる「構文スキーマ(constructional schema)」を導入するという方法を採用する。^[7] このとき、2つの構文スキーマのうち、図(2)(a)のように、最も顕著な成分を実現するスロットを<主体>に充てるものを「過程的構文(PROCESSUAL CONSTRUCTION)」と呼び、他方、右の図(b)のように、最も顕著な成分を実現するスロットを<対象>に充てるものを「存在論的構文(ONTOLOGICAL CONSTRUCTION)」と呼ぶことにしたい。



図(2)(a)

図(b)

以下の議論では、それぞれを便宜的に“P構文”および“O構文”と呼ぶ場合もある。ただし、第1節でも述べたように、ここでいうスキーマとは、統語的には述語成分と格成分を中心とする狭義の動詞句であって、先のドメインに相当するものと考えられたい。^[8]

他方、意味的な観点から言えば、存在論的構文は“存在のあり方”に基づくヴァリエーションの集合であり、或る領域(ドメイン)の中で或るもの(=対象)に対して何らかの判断を下すという意味で“価値的判断”と特徴づけることができる。これに対し、過程的構文の性格は“いくつかの格成分と述語が関与して形成される事象の描写”ということができよう。^[9] また、過程的構文のスキーマを発動する文型には一般動詞を述語とする文型が多く含まれるが、消極的には、O構文以外の文型の全てから構成されると考えれば十分であると考えている。したがって、両構文を特徴づけるのに、まず、次の第3節においてO構文の方を範疇化するつもりである。

なお、O構文においても、次の(3)(a)や(b)のように、時として<対象>が

「ヲ格」でマークされることがある。

- (3)(a) 太郎は花子を好きだった。
 (b) 新しいスキーウェアを欲しかった。

この現象は、特定の意味を実現させるという点では「ガ格」よりも「ヲ格」の方が安定しているという単純な性質に帰着させることができる。すなわち、O構文のスキーマを発動しているときにもく対象＝ヲ格>というアナロジーが働き、P構文スキーマからスロットが部分的に転写し、結果として、O構文の<対象>に「ヲ格」が与えられるというものである。

ここで注意すべきは、便宜上同じ用語を使ってはいるものの、O構文における<対象>とP構文における<対象>が質的に異なるという点である。つまり、前者が事象(過程)の中で<主体>との対立において把らえられる《論理的对象》であるのに対して、後者は判断における《認識的对象》であり、むしろ、存在の把握という認知処理の中では<主体>に近い性質をもつといってもいいかも知れない。

ところで、スキーマの中で「ガ格」が最も顕著(most salient)な要素であるためには、次のような条件が課せられることにも注意されたい。すなわち「ガ格」が最も顕著な項であるというのは、述語成分を含む最小の節(clause)の中に限るという点である。したがって、例えば、次の(4)(a)や(b)のように、複数の節が埋め込み構造をなしたとき、節(clause)の中で最も顕著な「ガ格」が、そのまま文全体の中でも顕著であるとは限らない。

- (4)(a) [私が秘書から聞いた]のは、これで全てだと認識いたしております。
 (b) なお、この処置は[本人が望んだものである]ことを申し添えておきます。

(4)(a)および(b)において、それぞれ「私」や「本人」が最も顕著であり得る

のは、それを含む最小の節(=[]の部分)の中だけであって、文全体では最も顕著であり得ない。

本節の終わりに、構文スキーマを導入することの妥当性について補足的な説明をしておきたい。構文のレベルにスキーマを設定することについては、次の2つの論拠が挙げられる。

第1の論拠はタイポロジーの観点から得られる妥当性である。すなわち、角田(1991)が強調しているように、世界の諸言語を通観しても、対格文<一が一を>だけが基本的・中心的な構文であるわけではなく、与格構文<一に一が>が通言語的に存在し多用されているという事実であり、したがって、少なくとも対格構文と与格構文の両方を基本構文として認める必要がある。非常に乱暴な言い方をしまえば、P構文スキーマとO構文スキーマは、それぞれ、対格構文と与格構文に近い性質をもつので、両極を固定するという意味で、スキーマの設定の仕方として妥当であると考えられる。

第2に、心理学的基盤に支持される点である。すなわち、ゲシュタルト心理学では、人間の認知(知覚)はある一定の枠組み(framework)の中で行われるというのが定説であるが、本稿でいう構文スキーマそのものは、ゲシュタルト的なく枠組>に相当すると考えていい：最も顕著であると認知するためには一定の枠組みを設定しなければならないからである。^[10] また「ガ格」が陳述(文)の中で部分として機能することに問題がないとすれば、人間の認知メカニズムに固有の《部分の意味は全体の意味によって決まる》というゲシュタルトの原理に合致する。具体的には、我々は、次のような図(3)を見たとき、左から2番目の文字はHと読むのに対し、同じく左から5番目の文字は、2番目の文字と全く同じ字形であるにもかかわらずAと解釈される。

T A E C A T

図(3)

このような解釈は、前者においては“THE”という単語を想起することによってトップダウン式に決定され、後者においては“CAT”という単語を想起することによって、同じくトップダウン式に決定されるのであって、それぞれの文字自体に解釈の決定能力があるわけではない。このような例が示すように、言語使用者が構文スキーマを発動するとき、同時に<ドメイン(domain)>を限定しているのであって、スキーマ的な“最高の顕著性の保持”も、このような一定の<ドメイン>の内部で行われるというものである。

本稿は、以上のような各論に支持されるものとして、構文のレベルで2種類のスキーマを提案するものである。それでは、次の第3節で存在論的構文を範疇化することへと進展させたい。

3. 存在論的構文の範疇化

前節で導入したように、存在論的構文(O構文)は、スキーマ内において最も顕著な要素を実現する「ガ格」を<対象>として規定する構文である。また、意味的には、その名称が示唆しているように《存在》を中心とするヴァリエーションの集合である。O構文は、非常に大まかに言うと“所動詞”“与格文”あるいは“主観表現(subjective expression)”などの用語で特徴づけられるが、正確には、これらの用語のどれも不十分である。^[11]

さて、存在論的構文は幾つかの文型から構成されるが、中心になるのは存在文である。日本語は《存在文》という固有の有標構文をもたないが、次の(5)のように「ある」「いる」あるいは「ない」を述語とする文型を基本的な存在文と見ていだろう。

- (5)(a) 地震の被害は今後も拡大する危険性がある。
- (b) 我々の到着を待っている人達が大勢いるんだ。
- (b) K首相には危機管理能力がないのではないかと思います。

ここで援用すべきは尾上(1985, 1987)の議論であり、次のように要約できる。す

なわち、(6)のような名詞構文(名詞を述語とする文)や、(7)のような形容詞文(形容詞を述語とする文)における「ガ格」は、同定や存在の量的な在り方を表すという点で、広義の存在文と見ていいというものである。

- (6)(a) これが私の任務であります。
 (b) これ見よがしに死ぬことが正義の死ではない。
- (7)(a) 本当に苦勞が多いんですね。
 (b) これでは量が少ないのではないですか。

また、他の情意形容詞(感情形容詞)や情態形容詞(性状形容詞)等についても、質的な相違はあるものの「ガ格」がことからの《中核的対象》を表すという点で、統括的に《主語》と認定してよいことになる。^[12]

- (8)(a) その人との別れが一番さびしかった。
 (b) 少し声が大きいですよ。
 (c) 手が痛い。

さらに、存在文・名詞構文・形容詞文に加えて、次の(9)のような知覚文における「ガ格」も、知覚の領域(ドメイン)内における存在を表すという意味で一種の存在文であり、したがって、これらの文の「ガ格」を《中核的対象》として主語とみなすことができるという。

- (9)(a) 向こうの白いビルが見えますか。
 (b) 聴衆の喝采がははっきりと聞こえました。

本稿では、上述の文型を拡大解釈することによって、以下のように存在論的構文を範疇化する。まず、上の知覚文を“視覚的聴覚的ドメインにおける存在の在り方”を表すものと認めるならば、メタフォリカルに拡張させることにより、次の

(10)のような“能力文”もまた広義に<能力の存在>ないしは<能力ドメイン内における存在のあり方>を表すといえることができる。

- (10)(a) わたしの言葉が分かりますか。
 (b) これなら両手が使えて便利ですね。

また、次の(11)のような願望・嗜好に関する価値的判断を表す文型にも拡張できる。

- (11)(a) 我々は本当のことが知りたいのです。
 (b) 髪の長い女性が好きです。

つまり「～したい」「欲しい」あるいは「好き」のような動詞を述語とする文では《中核的対象》としての「ガ格」成分を《希望》や《嗜好》という領域の中に存在させるという意味において、やはり一種の存在を表すと把らえることができるのである。

広義で<存在>を表す文型には、さらに次の2つを加えておく必要がある：1つは、いわば《その他の関係(在り方)に基づく存在》で、具体的には、次の(12)のように、関係や必要などの概念に基づく文型をいうものとする。

- (12)(a) この第八高等学校というのが現在の名古屋大学教養部にあたり
 ます。
 (b) この問題に取り組むには相当の忍耐力が要ると思いますよ。
 (c) これには相当の時間と労力がかかるでしょう。

このような「あたる」「要る」あるいは「かかる」等を述語とする文は、典型的な<存在>から拡張し<関係>や<在り方>の意味を色濃く帯びたものといえることができる。

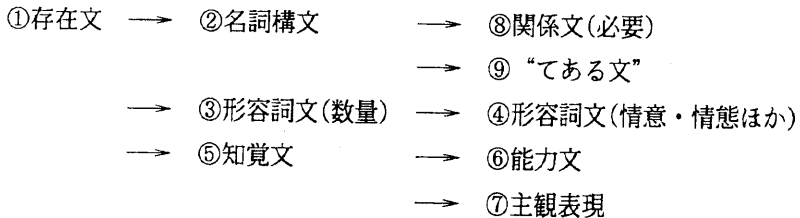
もう1つは、いわゆる“てある文”である。

- (13)(a) 花壇に水が撒いてある。
 (b) 草がきれいに刈ってある。

この(13)のような“てある文”における「ガ格」が意味的に〈対象〉であることは「ガ格」を「ヲ格」と交替できることから明らかであろう。

ここでの議論で一貫している原理は、第1に、上述の各文型を存在文の一種と把らえていることであり、第2に、〈存在するもの(知られるもの)〉と〈存在のあり方(知られること)〉との分化において、前者を導く「ガ格」を統一的に〈主語〉と認めているという点である。

以上を総括すると、存在論的構文を構成する文型は、次の9つの文型から構成される：すなわち、①純粹に存在の有無を表す存在文、②名詞構文、③数量に関する形容詞文、④その他の形容詞文、⑤知覚文、⑥能力文、⑦主観表現、⑧関係文(必要)、および、⑨“てある文”である。これらは、次の図(4)のように、存在文を中心メンバーとする「放射状範疇関係(radial relation)」をなすと考えていい。^[13]



図(4)(a)

この関係を意味的に把らえ直すと、次のようにも表せる。



- | | | | |
|---|---------|---------|------------|
| | → | 結果的位置づけ | |
| → | 量的な在り方 | → | 存在の中核的対象 |
| → | 知覚領域の存在 | → | 能力領域における存在 |
| | | → | 主観領域の存在 |

図(4)(b)

すなわち、①存在文を中心メンバーとして、同定(identification)を表すのが②の名詞構文であり、量的な在り方を前景化したのが③の形容詞文である。さらに、視覚的・聴覚的ドメインにおける存在を前景化したのが⑤の知覚文であり、ここまですが2次的な存在文ということになる。次に、3次的な存在文として、②における同定の意味から様々な関係によって位置づけられるのが⑧の関係文(必要)であり、特に結果的な位置づけを表すものが⑨の“てある文”に相当する。また、③の数量的な形容詞文からは④の形容詞文(情意・情態ほか)に拡張されると考えていい。これらに加えて、視覚的・聴覚的な⑤の知覚文が一般化されたのが⑥の能力文であり、願望や嗜好という主観的なドメインにおける存在にまで拡大解釈したのが⑦の主観表現ということになる。

4. O構文におけるプロトタイプ効果

前節で述べたように、O構文の諸文型が《存在》の意味を中心とするヴァリエーションの集合であるとする、当然《存在の在りか》ということが問題になる。一般に、存在文における《存在の在りか》は「二格」で導かれるが、O構文においては<存在の在りか>の全てが「二格」で導かれるわけではなく、ここに「プロトタイプ効果(prototype effect)」が具体的に反映される。¹¹⁴⁾

まず、下の(14)から分かるように、前節で述べた中心的(1次的)メンバーと2次的メンバーでは、広義の<存在の在りか>を「二格」で実現させることが可能である。

- (14)(a) 君のレポートに間違いが2カ所ありました。
 (b) 彼は仕事にミスが多いんですよね…
 (c) 君に私の声が聞こえますか。
 (d) 私に主任の役職が勤まるとは思いません。
 (e) グラウンドに穴が掘ってある。
 (f) この問題には相当の忍耐力が要ると思いますよ。

(14)(a)~(f)は、順に<存在><量的形容詞><知覚文><能力文><てある文>および<その他>を例示しているものである。ここから分かることは、典型的な存在文や量的な存在文は言うまでもなく、知覚・聴覚という抽象的領域に拡大したものでも<…ニ(ハ)~ガ存在スル>という基本的な存在の在り方が保持されている。また、3次的なメンバーでも、いわゆる“てある文”は具象的(物理的)な存在の意味が濃く、また、能力文も知覚(聴覚)文から直接的に導かれるので、ともに<…ニ(ハ)~ガ存在スル>という構図が保たれる。さらに、必要概念等を表す文型の中においても保持されている。

これに対し、次の(15)が示すように、3次的なメンバーのうちで、情意形容詞文・情態形容詞文および主観表現は、中心的な《存在》の原型から遠いために、広義の<存在の在りか>であっても、もはや「二格」で導くことができない。

- (15)(a) 豊太郎は / * に エリスが恋しくてならなかった。
 (b) この花は / * に 匂いがいいね。
 (c) 彼は / * に 髪の毛の長い女性が好きだった。

この(15)(a)(b)および(c)では、それぞれ<感情形容詞文><性状形容詞文>および<主観表現>を例証しているが、これらの文型では直接「ハ格」で導く以外にない。

このように、経験基盤主義に基づく「放射状範疇関係(radial relation)」や「プロトタイプ効果(prototype effect)」といった柔軟な概念を発動させることによ

て、より原型に近いものとそうでないものとの質的差異を明らかにすることが可能になるのである。

5. 結語と展望

本稿では《意味と形式の一対一対応》の原理から「ガ格」の多様性を解決するため2つの構文スキーマを提案するとともに、その骨子を概説した。特筆すべきは、全体にわたって認知過程を最大限考慮することにより、人間の認知や理解にとって自然な言語理論を目指している点である。

また、紙幅の都合で、個々の諸現象に対する具体的な適応の可能性については全く触れられなかった。本稿で提案した構文スキーマは、従来、取り扱いが複雑にならざるを得なかった問題に対して有効でなければならず、具体的には、①直接受け身文と間接受け身文の連続性と被害性の動機づけを説明すること、②助詞「は」の意味機能に対して統一的な原理を導出すること、③複文・重文における生成や図地反転の基本単位として機能させること、そして、④談話レベルと文レベルとの有機的な互換性を確保することが射程内に入って来るであろう。

重要なのは、言語現象の分析にあたっては、言語の構造的特性に加えて他の認知機構が適切に整合して初めて自然な説明が可能になるという点である。今後は、このような認知機構をも視野に含めた学際的・包括的な理論の構築が必要であることを強調しておきたい。

謝辞

* 本稿に対して草稿の段階で貴重な助言と文献の紹介を下された東京大学の川村大氏に感謝します。

注

[1] 日本語の構文スキーマ理論に関する詳細は、菅井(1992)および今後発表さ

- れる拙稿を参照されたい。また、本稿が立脚する認知言語学について全体像を理解するには、例えば、Rudzka-Ostyn ed. (1988)が適当であろう。
- [2] 言うまでもなく“one form for one meaning, one meaning for one form”の立場を初めて本格的に論じたのは Bolinger(1977)である。最近この立場を最も強力に打ち出しているのは Ruhl(1989)で「単義性(monosemy)」という用語を使っている。
- [3] 正確にいうと、尾上(1985, 1987)自身は《対象的中核》という用語を使っている。ここでは、意味の本質を失うことはないと考え、本理論における他の用語との関係で《中核的对象》と呼ぶことにする。
- [4] ただし「ガ格」における2つの意味とは、久野(1973)でいう「総記のガ」と「中立叙述のガ」のことではない。本理論では、この2つを本質的な差異とは認めていない。
- [5] この点について、Shibatani(1991)は動作者(agent)を「最も顕著な名詞成分(most prominent nominal element)」と明確に特徴づけている。また、動作者が典型的に実現される主語は節の中で最も焦点性が高い地位にある旨の記述は Shibatani(1985:832)にも見られる。
- [6] このように、抽象的な単一の意味が人間の認知能力によって具体的な個別の意味に分化するという考えは多義語の認知意味論的分析に由来する。認知意味論については、田中(1990)などを参照されたい。
- [7] 認知文法における「構文スキーマ(constructional schema)」の概念については、まず Langacker(1991:156-159)を参照されたい。そもそも「スキーマ(schema)」というのは認知科学に特有の概念で、知識の内部表現やパターン認識などのために用いられる。以下で用いる「スロット(slot)」および「トップダウン(top-down)」式処理という用語を含めて、認知科学の諸概念については、戸田ほか(1986)に分かりやすい解説がある。
- [8] ちなみに、存在論的構文の<主体>は「ハ格」によって導かれ、典型的には<存在の在りか>としての「ニ格」成分がスキーマの外へ取り出されたものと考えているが、この点については別の機会に取り上げることにしたい。

- [9] 言い換えれば、本稿のO構文は“存在のあり方を志向し構文において直接的に反映させるタイプ”であり、P構文は“存在を前提とした上で参与項の関係や叙述的な展開を志向するタイプ”と考えていい。ここで、もし、川端(1976, 1983)の言うように「およそ文は全て判断を表しその背後には存在がある」と考える限り、文のタイプを特徴づけるのに《存在》という概念を導入することはナンセンスであるという指摘があるかもしれない。しかしながら、たとえ、存在という概念が全ての文に共有されているとしても、存在のあり方を色濃く反映させるものとそうでないものがある点は認めなければならないはずである。本稿で示しているように、文型間におけるドメインの写像関係を明示的に体系化することが可能なもの、むしろ《存在のあり方》という概念を狭義に把らえていることに拠るところが大ききという点に注意されたい。
- [10] 枠組みの相違によって同一の形態が異なるものとして知覚されるという特性は、古典的なゲシュタルト心理学のパラダイムにとどまらず、市川ほか(1987)において認知心理学の立場からも有効であることが平明に示されている。
- [11] この「主観表現(subjective expression)」というのは Kaburaki(1977)の用語で、例えば「～がいとおいしい」「～がおもしろい」のようなものをいう。また、当然のことながら、時枝(1950)の《対象語格》を取るものも存在論的構文に含まれる。
- [12] 情意形容詞文と情態形容詞文における「ガ格」成分の質的相違、および両者の統一的解釈に関する論理的説明も、尾上(1985, 1987)において明確に与えられている。
- [13] ここでいう「放射状範疇関係」について、詳しくは Lakoff(1987: Ch. 17)を参照されたい。
- [14] 「プロトタイプ効果(prototype effect)」というのは、範疇内部の不均質性を反映した次のような現象をいう。つまり、ある範疇に対して固有にはたらく要因が存在するとき、その要因は範疇内のメンバー全てに対して一様に作用するのではなく、より典型的なメンバーほど適応されやすく、非

典型的なメンバーほど適応されにくいという性質である。詳しい内容については、Lakoff(1987)を参照されたい。

参考文献

市川伸一・伊東裕司 編著

1987『認知心理学を知る<第2版>』ブレーン出版.

尾上圭介

1985「主語・主格・主題」『日本語学』第4巻・第10号, pp. 30-38.

—————

1987「日本語の構文」山口明穂(編)『国文法講座6』明治書院, pp. 57-75.

川端善明

1976「用言」『岩波講座・日本語6巻』岩波書店.

—————

1983「日本文法提要3・文の構造と種類——形容詞文」『日本語学』第2巻・第5号, pp. 128-134.

久野 暉

1973『日本文法研究』大修館書店.

菅井三実

1992『日本語の構文スキーマに関する認知言語学的研究』名古屋大学修士論文.

田中茂範

1990『認知意味論——英語動詞の多義の構造』三友社出版.

角田太作

1991『世界の言語と日本語』くろしお出版.

時枝誠記

1950『日本文法 口語篇』岩波全書.

戸田正直ほか(共著)1986『認知科学入門——「知」の構造へのアプローチ』サイエンス社.

Bolinger, D. 1977 Form and Meaning. London : Longman.

Kaburaki, E. 1977 "Japanese Reflexive 'Zibun' as a Subjective Expression," 『武蔵野女子大学紀要12号』 pp.31-51.

Lakoff, G. 1987 Women, Fire, and Dangerous Things. (what categories reveal about the mind.) Chicago :

University of Chicago Press.

- Langacker, R.W. 1991 Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application : Stanford CA. : Stanford University Press.
- Rudzka-Ostyn, Brygida (ed.)
 1988 Topics in Cognitive Linguistics, Current Issues in Linguistic Theory Series IV. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamin Publishing Company.
- Ruhl, Charles. 1989 Monosemy : A study in Linguistic Semantics. State University of New York Press.
- Shibatani, M. 1985 "Passives And Related Construction : A Prototype Analysis," Language, 61(4), pp.821-848.
- 1991 Toward a Cognitive Grammar of Voice Construction. 第103回 日本言語学会講演資料, 1991年10月26日, 於. 南山大学.

(すがい かずみ 言語学)